



Subaru

昇 男声合唱団

ニュース No.303 '11. 05. 18



## 樋渡さんご逝去...謹んでお悔やみ申し上げます

樋渡誠さんのご逝去を悼む

立川さん寄稿

樋渡さんが5月13日にご逝去されました。昨年から腰に痛みがあり、いつもの腰痛と思い検査したところ副腎癌とのことでした。4月に入ってから池田市立病院に入院し抗癌治療に踏み切ったとのことですが、日々体が弱っていったとのこと。5月10日に退院され家族全員で声をかけはげまして看護されたそうです。次に御通夜と告別式のことをおしらせします。

御通夜は祭壇にはたくさんの供花で埋め尽くされ、中央に樋渡さんの意思の強そうな大きな目をした写真が飾られていました。本人が無宗教ということで、お寺さんの読経は無しで、司会の進行で進められ、最初に経歴が紹介されました。彼の苦難の始まりは一家全員で満州開拓団に参加したことです。現地に着くとすぐ父親が亡くなり、ついで二人の兄が徴兵された後、敗戦で30里の道を逃避行するも帰国のあてもなく、またもと来た道に戻ることになり、途中で盗賊に遭い、やっとの思いで開拓地に着くも、すべて略奪されており着る物も食べるものもなく想像を絶する生活でした。3年後帰国途中に母親が亡くなり、兄弟4人で帰国出来たものの、18歳まで孤児院で育ち、その後、関目学園・池田市民病院に働く傍ら関西合唱団に入団し奥さんと出会いました。3人の子どもを共働きでしっかり育て上げ、定年後は共産党の専従として赤旗の配達など昼夜を分かたぬ献身的な活動をされてきました。10年前から男声合唱団昇得水を得た魚のように「うたごえは平和の力」と力強く歌い続けてこられました。うたごえ運動で奥さんと出会っただけに、その後のあらゆる活動の場に奥さんもご一緒されました。無口な彼の代わりに立て板に水の如く喋られる奥さんにととても親しみを覚えました。76歳という生涯でしたが、あの悲惨な戦争体験から彼の人生は反戦平和を貫き民主主義が花開き、みんなが平等の暮らしを守るための政治革新の道だったと紹介を聞くと、心から「ご苦労様でした。」そして「あなたが築かれた道」を私たちもしっかり歩んでいきますと思いを新たにしました。次に本並さんの弔辞があり、その後「同志は倒れぬ」を昇で合唱しました。その後は家族全員の弔辞で先ず奥さんは「生まれ変わっても結婚したい」と語られ、お子さんやお孫さんは「家族を大事にしてくれたことを感謝している」と口をそろえて言われていました。そして全員が献花しておわりました。

告別式はやはり司会の進行で、先ず本人の経歴紹介があり、次に共産党議員候補の方から彼の献身的な活動歴が紹介されました。責任感が強く支部の中心的存在で奮闘してこられ、平和と民主主義を守る政治革新のためにまさに命をかけてこられたことに頭が下がりました。

次に藤後団長の涙ながらの弔辞は満州時代そしてうたごえの長きにわたる掛け替えのないまさに同志を失ったことの悔しさに溢れていました。そして平和に生きた彼に捧げる歌「フィンランディア」を昇が合唱しました。最後の方は感極まり涙で声になりませんでした。そして全員の献花の後、またまた全員で彼の棺に花や赤旗や酒など、ゆかりの物を納めました。式の最後は参加者全員で「わが母のうた」を歌いました。奥さんの最後の挨拶の後、出棺の時に再び「フィンランディア」を歌い送りました。

平和の戦士にぴったりな本当に哀悼の思いに溢れた格調高い式でした。コンサート前に友を亡くしたことはほんとうに悔しさでいっぱいですが、一緒に歌いたかった彼の思いを一人ひとりが胸に

抱いて歌いコンサートを成功させましょう。

## 弔 辞

樋渡 誠さん

ついこのあいだまで一緒に歌っていたのに、こんなに突然お別れの言葉を述べるとは、思いもかけませんでした。霊前に向かいながら、今も君の透き通った綺麗な歌声が聞こえてくるような気がしてなりません。元気になられたら、また一緒に歌おうと思っていたのに残念でたまりません。

思い起こせば、奇しくも君と僕はかつての満州国で平和な生活を営んでいました。そのころの君は両親と兄弟に囲まれて、勉学に勤しむ十三歳のあどけない小学生でした。そして、僕は、大陸に夢を託した十六歳の純粹無垢な一人の軍国少年でした。

しかし、二人は敗戦前後を境に、予想もしていなかった、言葉で言い尽くせない生死を彷徨う凄惨な逃避行を、余儀なくされました。幸いにも二人は生き抜くことができましたが、君からこの戦争の悲惨さと、平和の大切さを子どもながらも悟ったということ、君が書いた手記から理解しました。それは、僕にも共有できる出来事でもありました。そして、このような同じ境遇にあった君と僕のその後の人生を歩む原点が、ここで培われたと僕は思っています。帰国後、二人が歩んだ民主主義と平和を守る革新運動への道が、それを如実に物語っており、また、二人の誇りでもありました。

帰国後、君との出会いは、関西の「うたごえ運動」の拠点—関西合唱団でした。青年に成長した君と僕は、再び戦争を許してはならない思いを「うたごえ」運動に託して、この道に入っていました。そして、僕にとって君は「うたごえ運動」の先達であり、よきアドバイザーでもありました。その頃でも、今でも、君のソリストとして活躍された凛々しい姿は、僕の目に焼きついています。また、君とは、あの歴史に残る砂川基地反対、三井三池支援、安保反対などのたたかいに、「うたごえ行動隊」の一員として、共に参加したことは、決して忘れることはできません。

私生活では、君とは数年間下宿を共にし、それ以来五十数年に亘って二人の友情を育み、励ましあってきました。僕にとってはかけがえのない親友でありました。僕が男声合唱団「昂」を立ち上げたときに、一番に馳せ参じてくれたのも君でした。そして、「昂」の発展に大きく寄与し、自他ともに誇れる男声合唱団「昂」の育成に、尽力していただきました。ほんとうにありがとうございました。

男声合唱団「昂」は、君の遺志を受け継いで平和の歌を広めることをここに誓い、団員みんなが君が好きだったシベリアスの平和賛歌—「フィンランディア」をここに捧げ、追悼の辞とします。

樋渡誠さん、どうか安らかに眠りください。

2011年5月15日

男声合唱团「昂」团长 藤后博巳

No.303 (2/2)